広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	王義之と「游目」の娯しみ
Author(s)	佐藤, 利行
Citation	中國中世文學研究 , 63-64 : 36 - 45
Issue Date	2014-09-29
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051448
Right	
Relation	

王羲之と「游目」の娯しみ

佐藤利行

はじめに

王羲之の書翰は、今日までおよそ七百条が伝えられている。[1] その中に「游目」（遊目）という語が用いられているものが四条ある。次に挙げる書翰は、その中の一つで益州刺史の周撫に宛てたものである。[2]

省足下別疏、具彼土山川諸奇。楊雄蜀都、左太沖三都、殊為不備悉。彼故為多奇、益令其游目意足也。可得果、当告卿求迎。少人足耳。至時示意。遅此期、真以日為歳。想足下鎮彼土、未有動理耳。要欲及卿在彼、登汶嶺峩眉而旋。実不朽之盛事。但言此、心以馳於彼矣。（『右軍』七・『淳化』三・『二王』上）

足下の別疏を省るに、彼の土の山川諸奇を具にす。楊雄の「蜀都」、左太沖の「三都」も、殊に備悉ならずと為す。彼は故より奇多しと為せば、益ます其の游目の意をして足らしめん。果たすを得可くんば、当に卿に告げて迎へを求むべし。少人にて足るのみ。要ず卿の彼に在るに及び、汶嶺・峩眉に登りて旋らんと欲す。実に不朽の盛事なり。但だ此を言へば、心は以に彼に馳す。

「あなたからの別疏を見ますに、そちらの山川や珍しい産物などが詳しく書かれていました。これではあの楊雄の『蜀都の賦』や左思の『三都の賦』も、十分なものとは言えません。そちらはもとより奇勝が多いので、いよいよこの『目を游ばせる人』の思いを満足させてくれることでしょう。行けるようになったら、あなたに連絡して迎えの者をよこすように頼みます。少しの人数で十分です。その時になったらお知らせします。その日が来るのを、まことに一日が一年のような思いで待っております。思いますに、あなたはそちらを治めてられて、まだ転勤されることもないでしょうが、どうかあなたがそちらにいらっしゃる間に、汶嶺・峩眉の山々に登ってきたいものです。このことは本当に『不朽の盛事』というものです。このようなことを口にしただけで、心はもはや彼の地に馳せております」という内容の手紙である。

ここでは、「游目」の語を、「目を遊ばせる人」である羲之みずからを指しており、「山水遊覧を楽しみにしている自分」のことを言う語として用いている。

以下、小論では羲之の「游目」の語に着目し、そこに込められた羲之の思いや、その語を用いて書翰を送った相手である羲之の友人であった周撫との関わりなどについて考察する。

益州刺史周撫との関わり

周撫は周訪（字は士達）の子である。そもそも周訪は、安南将軍・梁州刺史などを歴任した人物で、王敦も一目置くほどの武人であった。撫も東晋になってからは王敦の部下となって重用された。後に王敦が謀反を起こした時に、撫は敦に従うことになったが、後に赦されて司徒王導の従事中郎となっている。このように、周撫は王敦に重用され、王導にも目をかけられるほどに王氏とは深く関わりのあった人物である。ここで『晋書』巻五十八にある周撫の伝を見てみよう。

撫字道和。強毅有父風、而将御不及。元帝辟為丞相掾。父喪去官。服闋襲爵、除鷹揚将軍、太武昌守。王敦命為従事中郎、與鄧嶽俱為敦爪牙。甘卓遇害、敦以撫為沔北諸軍事、南中郎将、鎮沔中。及敦作逆、撫領二千人従之。敦敗、撫與嶽俱亡走。撫弟光将資遺其兄、而陰欲取嶽。嶽怒曰、「我與伯山同亡。何不先斬我」。会嶽至、撫出門遙謂之曰、「何不速去。今骨肉尚欲相危、況他人乎」。嶽迴船而走、撫遂共入西陽蛮中。蛮酋向蠶納之。

初嶽為西陽、欲伐諸蛮。及是諸蛮皆怨、将殺之。蠶不聴曰、「鄧府君窮来帰我。我何忍殺之」。由是俱得免。明年、詔原敦党。嶽撫詣闕請罪、有詔禁錮之。

咸和初、司徒王導以撫為従事中郎、出為寧遠将軍、江夏相。蘇峻作逆、率所領従温嶠討之。峻平、遷監沔北軍事、南中郎将、鎮襄陽。石勒将敦敬率騎攻撫。撫不能守。率所領奔于武昌、坐免官。尋遷振威将軍、豫章太守、後代毋丘奥監巴東諸軍事、益州刺史、假節、将軍如故。尋進征虜将軍、加督寧州諸軍事。

永和初、桓温征蜀、進撫督梁州之漢中巴西梓潼陰平四郡軍事、鎮彭模。撫撃破蜀餘寇隗文、鄧定等、斬偽尚書僕射王誓、平南将軍王潤、以功遷平西将軍。隗文、鄧定等復反、立范賢子賁為帝。初、賢為李雄国師、以左道惑百姓、人多事之、賁遂有衆一萬。撫與龍驤将軍朱燾撃破斬之、以功進爵建城県公。

征西督護蕭敬文作乱、殺征虜将軍楊謹、拠涪城、自号益州牧。桓温使督護鄧遐助撫討之、不能抜、引退。温又令梁州刺史司馬勲等会撫伐之。敬文固守、自二月至于八月、乃出降。撫斬之、伝首京師。

升平中、進鎮西将軍。在州三十餘年、興寧三年卒。贈征西将軍、諡曰襄。子楚嗣。

撫、字は道和。強毅にして父の風有るも、而も将御は及ばず。元帝 辟して丞相の掾と為す。父の喪に官

を去る。服闋(やみ)み爵を襲ひ、鷹揚将軍・太武昌守に除せらる。王敦 命じて従事中郎と為し、鄧嶽と倶に敦の爪牙と為る。甘卓 害に遇ひ、敦は撫を以て沔北諸軍事・南中郎将と為し、沔中に鎮せしむ。敦の逆を作すに及び、撫は二千人を領して之に従ふ。敦 敗れ、撫は嶽と倶に亡走す。撫の弟光は資を将(もつ)て其の兄に遺して、陰(ひそ)かに嶽を取らんと欲す。嶽怒りて曰く、「我は伯山と同に亡ばん。何ぞ先づ我を斬らざる」と。会たま嶽至り、撫は門を出でて遙かに之に謂ひて曰く、「何ぞ速かに去らざる。今、骨肉すら尚ほ相ひ危ふからんとす、況んや他人をや」と。嶽は船を迴(に)して走げ、撫は遂に共に西陽の蛮中に入る。蛮の酋向瓥は之を納る。

初め嶽は西陽を為め、諸蛮を伐たんと欲す。是に及んで諸蛮は皆な怨み、将に之を殺さんとす。瓥は聴(ゆる)さずして曰く、「鄧府君は窮し来たりて我に帰す。我何ぞ之を殺すに忍ばん」と。是に由りて倶に免るるを得たり。明年、詔して敦の党を原(ゆる)す。嶽・撫は闕に詣りて罪を請ふに、詔有りて之を禁錮す。

咸和の初め、司徒王導は撫を以て従事中郎と為し、出でて寧遠将軍・江夏の相と為る。蘇峻 逆を作すや、領する所を率ゐて温嶠に従ひて之を討つ。峻の平ぐや、監沔北軍事・南中郎将に遷り、襄陽に鎮す。石勒の将郭敬は騎を率ゐて撫を攻む。撫は守る能はず、領する所を率ゐて武昌に奔り、坐して官を免ぜらる。尋いで振威将軍・豫章の太守に遷り、後に毋丘奥に代はり監巴東諸軍事・益州刺史・假節となり、将軍は故の如し。尋いで征虜将軍に進められ、督寧州諸軍事を加へらる。

永和の初め、桓温は蜀を征し、撫を進めて梁州の漢中・巴西・梓潼・陰平四郡軍事を督せしめ、彭模に鎮す。撫は蜀の餘寇隗文・鄧定等を撃破し、偽尚書僕射の王誓・平南将軍の王潤を斬り、功を以て平西将軍に遷る。隗文・鄧定等は復た反し、范賢の子賁を立てて帝と為す。初め、賢は李雄の国師と為り、左道を以て百姓を惑はし、人 多く之に事(つか)ふ。賁 遂に衆一萬有り。撫は龍驤将軍朱燾と撃破して之を斬り、功を以て爵を建城県公に進めらる。

征西督護の蕭敬文 乱を為し、征虜将軍の楊謹を殺し、涪城に拠りて、自ら益州の牧と号す。桓温は督護の鄧遐をして撫を助けて之を討たしむるも、抜くこと能はずして、引退す。温は又た梁州刺史の司馬勲等をして撫に会して之を伐たしむ。敬文は固く守り、二月より八月に至るも、乃ち出でて降る。撫は之を斬り、首を京師に伝ふ。

升平中、鎮西将軍に進めらる。州に在ること三十餘年、興寧三年 卒す。征西将軍を贈られ、諡して襄と曰ふ。子の楚 嗣ぐ。

ここに「敦の逆を作すに及び、撫は二千人を領して之に従ふ。敦 敗れ、撫は嶽と倶に亡走す」とあるのは、『晋

書』巻六「明帝紀」の次の記述をいう。

（太寧二年）秋七月壬申朔、敦遣其兄含及銭鳳、周撫、鄧岳等水陸五萬、至于南岸。温嶠移屯水北、焼朱雀桁、以挫其鋒。帝躬率六軍、出次南皇堂。至癸酉夜、募壮士、遣将軍段秀、中軍司馬曹渾、左衛参軍陳嵩、鍾寅等。甲卒千人渡水、掩其未畢。平旦戦于越城、大破之、斬其前鋒将何康。王敦噴惋而死。秋七月壬申朔、敦は其の兄の含及び銭鳳・周撫・鄧岳ら水陸五萬をして、南岸に至らしむ。温嶠は屯を水北に移し、朱雀桁を焼き、以て其の鋒を挫く。帝は躬（みづから）ら六軍を率ゐ、出でて南皇堂に次（やど）る。癸酉の夜に至りて、壮士を募り、将軍段秀・中軍司馬曹渾・左衛参軍陳嵩・鍾寅らを遣はす。甲卒千人 水を渡り、其の未だ畢らざるを掩ふ。平旦に越城に戦ひて、大いに之を破り、其の前鋒将何康を斬る。王敦は噴惋して死す。

また、「石勒の将郭敬は騎を率ゐて撫を攻む。撫は守る能はず、領する所を率ゐて武昌に奔り、坐して官を免ぜらる」と見えるが、これは『晋書』巻七「成帝紀」に、

（咸和五年）秋八月、石勒僭即皇帝位、使其将郭敬寇襄陽。南中郎将周撫退帰武昌。

秋八月、石勒 僭して皇帝の位に即き、其の将郭敬をして襄陽に寇せしむ。南中郎将周撫は退きて武昌に帰る。

とある記述と一致する。

また、周撫の本伝に「永和の初め、桓温は蜀を征し、撫を進めて梁州の漢中・巴西・梓潼・陰平四郡軍事を督せしめ、彭模に鎮す。撫は蜀の餘寇隗文・鄧定等を撃破し、偽尚書僕射の王誓・平南将軍の王潤を斬り、功を以て平西将軍に遷る」とあるのは、『晋書』巻八「穆帝紀」に、

（永和二年）十一月辛未、安西将軍桓温帥征虜将軍周撫、輔国将軍譙王無忌、建武将軍袁喬、伐蜀、拝表輒行。

十一月辛未、安西将軍桓温は征虜将軍周撫・輔国将軍譙王無忌・建武将軍袁喬を帥ゐて、蜀を伐ち、拝表して輒ち行く。

とあることをいう。

以上のように、『晋書』本伝および帝紀に見られる記述からは、王羲之と周撫との直接的な関わりを見ることはできない。しかし、先にも述べたように、周撫は王敦に重用され、王導にも目をかけられるほどに王氏とは深く関わった人物であり、当然のことながら羲之とも関わりがあったに違いないと思われる。

ところで二人が亡くなった年、すなわち升平五年（三六一）に羲之から周撫に宛てたと思われる次のような書翰がある。

足下今年、政七十耶。知體気常佳。此大慶也。想復懃加頤養。吾年垂耳順。推之人理、得爾以為厚幸。但恐前路転欲逼耳。以爾、要欲一遊目汶領。非復常言。足下但当保護以俟此期。勿謂虚言。得果此縁、一段奇事也。

（『淳化』四・『二王』上）

足下は今年、政に七十なる耶。體気の常に佳なるを知る。此れ大慶なり。復た懃に頤養を加へんことを想ふ。吾は年 耳順に垂んとす。之を人理に推すに、爾るを得たるは以て厚幸と為す。但だ前路の転た逼らんと欲るを恐れるのみ。爾るを以て、一たび汶領に遊目せんと要欲す。復た常言に非ず。足下は但だ当に保護して、以て此の期を俟つべし。虚言と謂ふこと勿かれ。此の縁を果たすを得ば、一段の奇事なり。

すなわち、「あなたは今年、ちょうど七十になられるのでしょう。いつもお元気だということなので、たいへん喜んでおります。どうか更に十分に養生して下さい。私も耳順の年になろうとしております。人の世の道理からして、この年まで生きられたのはとても幸せなことと思います。ただ、行くさきが次第に迫っていることが気がかりでなりません。というわけで、ぜひ一度、汶嶺へ遊びに行きたいと思います。口先だけのことではありません。あなたはお体を大切にして、その時期が来るのを楽しみに待っていて下さい。嘘言だと思ってはいけません。この事が果たせたならば、すばらしいことです」という内容のものである。

この時、羲之は五十九歳、周撫は七十歳。書翰の中にも「之を人理に推すに」すなわち、人間の寿命から言えば、ともに長生きをしたことになるという。老い先の短いことを気に掛けながら羲之は、周撫のいる蜀に出かけ汶嶺に登ってみたいという願いを懐いていたのであるが、結局この願いは叶えられることなく二人ともに此の年に世を去ってしまう。

羲之よりも十一歳年上の周撫は、乱世の時代にあって真に心を許すことのできる友人であったことが、これらの書翰から分かるのではなかろうか。

「游目」の娯しみ

そもそも「游目」の語は、古くは『楚辞』離騒に、

忽反顧以遊目兮、将往観乎四荒。

忽ち反顧して以て目を遊ばしめ、将に往きて四荒を観んとす。

と見えている。すなわち「游目」とは、気の向くままに近くから遠くを見回す、ということである。この語は、次に挙げるように後漢・班固の「西都賦」（『文選』巻一）にも、

神明鬱其特起、遂偃蹇而上躋、軼雲雨於太半、虹霓迴帶於棼楣。雖軽迅與慓狡、猶愕眙而不能階。攀井幹而未半、目眴転而意迷、舍櫺檻而郤倚、若顛墜而復稽、魂怳怳以失度、巡迴塗而下低。既懲懼於登望、降周流以徬徨、歩甬道以縈紆、又杳窱而不見陽。排飛闥而上出、若遊目於天表、似無依而洋洋。

神明 鬱として其れ特り起ち、遂に偃蹇として上躋し、雲雨を太半に軼ぎしめ、虹霓 棼楣に迴帶す。軽迅と慓狡と雖も、猶ほ愕眙として階ること能はず。井幹を攀ぢて未だ半ばならざるに、目 眴転として 意は迷ひ、櫺檻を舍てて郤き倚り、顛墜するが若くにして復た稽り、魂 怳怳として以て度を失ひ、迴塗を巡りて下低す。既に登望に懲懼し、降りて周流して以て徬徨し、甬道を歩して以て縈紆し、又た杳窱として陽を見ず。飛闥を排いて上り出づれば、目を天表に遊ばしむる若く、依る無くして洋洋たるに似たり。

と見えている。これは未央宮から建章宮に通ずる道路および建章宮の様子について述べた箇所であるが、その中で「目を天表に遊ばしむる若く、依る無くして洋洋たるに似たり」と、「遊目」の語が用いられている。ここでは『楚辞』離騒を踏まえて遠くを見はるかす意に此の語を用いている。当然のことながら李善注には、先に挙げた『楚辞』離騒を引いている。

ところで「游目」の語は、王羲之の「蘭亭序」にも用いられている。ここで「蘭亭序」を見てみよう。

永和九年、歳在癸丑。暮春之初、会于会稽山陰之蘭亭。修禊事也。羣賢畢至、少長咸集。此地有崇山峻嶺、茂林脩竹、又有清流激湍、映帯左右。引以為流觴曲水、列坐其次。雖無糸竹管弦之盛、一觴一詠、亦足以暢叙幽情。

是日也、天朗気清、恵風和暢。仰観宇宙之大、俯察品類之盛。所以游目騁懐、足以極視聴之娯、信可楽也。

夫人之相與、俯仰一世、或取諸懐抱、悟言一室之内、或因寄所託、放浪形骸之外。雖趣舍萬殊、静躁不同、当其欣於所遇、暫得於己、快然自足、不知老之将至。及其所之既倦、情随事遷、感慨係之矣。向之所欣、俯仰之間、已為陳跡、猶不能不以之興懐。況修短随化、終期於尽。

古人云、「死生亦大矣。」豈不痛哉。毎覧昔人興感之由、若合一契。未嘗不臨文嗟悼、不能喩之於懐。固知、一死生為虚誕、斉彭殤為妄作。

後之視今、亦猶今之視昔。悲夫。故列叙時人、録其所述。雖世殊事異、所以興懐、其致一也。後之覧者、亦将有感於斯文。

永和九年、歳は癸丑に在り。暮春の初め、会稽・山陰の蘭亭に会す。禊事を修むるなり。羣賢 畢く至り、少

長咸な集ふ。此の地に崇山 峻嶺、茂林 脩竹有り、又た清流 激湍の、左右に映帯する有り。引きて以て流觴の曲水と為し、其の次に列坐す。糸竹管弦の盛んなる無しと雖も、一觴一詠、亦た以て幽情を暢叙するに足る。

是の日や、天朗らかに気清み、恵風 和暢す。仰ぎて宇宙の大なるを観、俯して品類の盛んなるを察す。目を游ばしめ懐ひを騁する所以にして、以て視聴の娯しみを極むるに足り、信に楽しむ可きなり。

夫れ人の相ひ與に、一世に俯仰するや、或いは諸を懐抱に取り、一室の内に悟言し、或いは託する所に寄するに因りて、形骸の外に放浪す。趣くと舎まると萬に殊なり、静と躁と同じからずと雖も、其の遇ふ所を欣び、暫く己に得るに当たりては、快然として自ら足り、老の将に至らんとするを知らず。其の之く所の既に倦み、情は事に随ひて遷るに及んでは、感慨 之に係る。向の欣ぶ所は、俯仰の間に、已に陳跡と為り、猶ほ之を以て懐ひを興さざる能はず。況んや修と短と化に随ひ、終に尽くるに期するをや。

古人云ふ、「死生は亦た大なり」と。豈に痛まざらんや。昔人 感を興すの由を覧る毎に、一契を合するが若し。未だ嘗て文に臨みて嗟き悼まずんばあらざるも、之を懐に喩る能はず。固に知る、死と生を一とするは虚誕為り、彭と殤を斉しくするは妄作為るを。

後の今を視るや、亦た猶ほ今の昔を視るがごとからん。悲しい夫。故に時人を列叙して、其の述ぶる所を録す。世は殊なり事は異なると雖も、懐ひを興す所以は、其の致は一なり。後の覧る者、亦た将に斯の文に感あらんとす。

第二段落に「游目」の語が見えている。この段の内容は「この日は、天は朗らかに晴れわたり空気は澄みきって、春風がおだやかに吹きわたった。仰いでは限りない宇宙の大なるを観、俯しては盛んなる万物を見る。かくして目を遊ばせ、懐いを騁せ、目や耳を十分に娯しませることができ、本当に楽しいことである」というものである。思いにまかせて自由に目に映るものを眺め、耳に入るものを聞く、これこそが羲之の求めるものであった。

『晋書』王羲之伝には、次のようにある。

羲之雅好服食養性、不楽在京師。初渡浙江、便有終焉之志。会稽有佳山水、名士多居之。謝安未仕時、亦居焉。孫綽・李充・許詢・支遁等、皆以文義冠世。並築室東土、与羲之同好。嘗与同志、宴集於会稽山陰之蘭亭、羲之自為之序、以申其志。

羲之は雅より服食養性を好みて、京師に在るを楽しまず。初め浙江を渡るに、便ち終焉の志有り。会稽に佳き山水有り、名士は多く之に居む。謝安の未だ仕へざりし時、亦た焉に居む。孫綽・李充・許詢・支遁ら、皆な文義を以て世に冠たり。並びに室を東土に築き、羲之と好みを同じくす。嘗て同志と会稽・山陰の蘭亭に宴集し、羲之は自ら之が序を為りて、以て其の志を

申ぶ。

羲之はもともと服食養生を好んでおり、[3]浙江を渡って会稽に来てからは、その地で一生を終えるつもりであったという。そこで孫綽・李充・許詢・支遁ら羲之と好みを同じくする人たちと会稽郡山陰県の蘭亭に宴集し、みずから序を作ったのである。

この序文からは、羲之の抱いていた思想を読み取ることができる。特に生死の問題に関する羲之の思いは、今生きているこの時が全てなのであって、死後のことをあれこれを考えても仕方のないことである、というものであった。そのためには、目の前に広がる自然の美しさを十分に楽しむことが重要であると羲之は考えていたのではなかろうか。「目を游ばしめ懐ひを騁する所以にして、以て視聴の娯しみを極むるに足り、信に楽しむ可きなり」に、羲之のそのような思いが込められているように思われる。

ところで、西晋の潘岳は妻の父である楊肇（字は季初）のために「楊荊州誄」（『文選』巻五十六）を作っているが、その中で肇が敗戦によって国に帰った後のことを述べる段に次のようにある。

退守丘塋、杜門不出。游目典墳、縦心儒術。

退きて丘塋を守り、門を杜ぢて出でず。目を典墳に游ばしめ、心を儒術に縦にす。

これに拠れば、「游目」の語は、ひたすら読書に没頭することを表現するために用いられているようである。「游目」は、ただ自然の景物を眺め楽しむというのではなく、自然の事物以外の物であっても、それを心の趣くままに眺め見るという意味でも用いられている。

また、劉宋の傅亮の「感物賦」（『全宋文』巻二十六）では、その序において、

夜清務隙、遊目藝苑。

夜は清く務めに隙あれば、目を藝苑に遊ばしむ。

とあって、これも潘岳の用例と近いものである。このように「游目」とは、ただ単に事物を眺めるというのではなく、そこには何からも強制されない自由な心からの行為であることが此の語を用いる前提であるように思われる。

おわりに

先に王羲之からの周撫宛ての二条の書翰に、「游目」の用例があることを紹介したが、この他の用例としては以下の二条がある。

知彼清晏歳豊。又所使有無一郷、故是名處。且山川

形勢乃爾。何可以不遊目。（『淳化』四・『二王』上）

彼の清晏にして歳の豊かなるを知る。又た一無きを有らしむるの所の郷にして、故より是れ名處なり。且つ山川の形勢は乃ち爾り。何ぞ以て遊目せざる可けんや。

「彼の地が平安で実り豊かなことを知りました。また、無を有にしてくれる所で、もとよりこれは天下の名所です。その上、山川の形勢もすばらしく、どうして遊覧せずにおれましょうか」という内容のこの書翰は、やはり益州刺史であった周撫に宛てたものと思われる。

次の書翰も、或いは周撫宛てのものであろうか。

頃猶小差。欲極遊目之娯、而吏卒守之。可歎耳。陽花果似小可。何日得卿諸人共賞。（『右軍』三三一）

頃ろ猶ほ小しく差ゆ。遊目の娯しみを極めんと欲するも、而も吏卒之を守る。歎く可きのみ。陽花は果たして小しく可なるが似し。何れの日にか卿ら諸人と共に賞するを得ん。

「近ごろ少しはよくなりました。遊びに出かけたいのですが、吏卒が護衛しております。まことに残念です。陽花は果たしてだいぶ咲いているようです。何日になったらあなた方と見に行くことができるのでしょうか」というものであるが、これらの二つの書翰に見える「游目」は、いずれも遊覧に出かける、というものである。

ところで羲之の息子である王献之の逸話が『世説新語』言語篇に伝えられている。

王子敬云、従山陰道上行。山川自相映発、使人応接不暇。若秋冬之際、尤難為懐。

王子敬云ふ、「山陰道上より行けば、山川 自ら相ひ映発し、人をして応接に暇あらざらしむ。秋冬の際の若きは、尤も懐を為し難し」と。

王羲之が蘭亭の宴を開催した会稽郡山陰県あたりの風景は、まさにこのような美しいものであった。こうした自然の美しさに「目を游ばせる娯しみ」こそが、今その時を大切に生きようとした羲之の願いであったに違いない。

注

（1）森野繁夫・佐藤利行『王羲之全書翰』（白帝社）を参照。

（2）テキストとして使用したのは、唐・張彦遠輯『右軍書記』（津逮秘書本『法書要録』所収）、清・乾隆三十四年勅輯『淳化閣帖』（広雅書局刊『武英殿聚珍版』所収）、宋・許開撰『二王帖評釈』（『横山草堂叢書』所収）である。『右軍書記』については、宋・朱長文『墨池編』（康熙五十三年裔孫之勵就間堂刊本）所収のものと、明・王世貞『王氏書苑』（民国十一年上海泰東図書局用原刻本景印）所収のものを参照した。

（3）佐藤利行「王羲之と五石散」（『広島大学大学院文学研究科論集』第六十五巻）